外国人が和楽器を学ぶための教習方法に対する考察: コロンビア大学MP プログラム（雅楽部門）の事例を基に

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2019-02-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 華子, 清水, チャートリー, Yamamoto, Hanako, Shimizu, Chatori メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/959

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

洗足論叢　第 47 号　平成 30 年度

研究ノート

外国人が和楽器を学ぶための教習方法に対する考察

―コロンビア大学 MP プログラム（雅楽部門）の事例を基に―

A Study on Japanese Instrumental Training Methods for Non-Japanese Students:
Cases of Columbia University Mentor/Protégé Program (Gagaku)

山本華子　　清水チャートリー
Hanako Yamamoto, Chatori Shimizu

1　序論

1-1　研究の背景と目的

西洋クラシック音楽の教習は、今や国境を越えて世界中に浸透しており、非西洋人であれ、西洋人に劣らぬ、あるいはそれ以上のレベルに達している。ところがその逆の場合はどうであろうか。例えば西洋人が東洋の伝統音楽を学ぶ機会や割合は必ずしも高いとは言えない。これは普及の度合いの問題だけに起因するのだろうか。むしろ対象とする音楽の特徴、伝承形態によるところが大きいのではないだろうか。

そこで、本研究は、和楽器を外国人が学ぶ機会とその教習方法について、アメリカのコロンビア大学中世日本研究所・日本文化戦略研究所が運営している MP プログラム（雅楽部門）の事例から考察する。MP プログラムとは、Mentor/Protégé[1] プログラム（以下、MP プログラム）の略で、和楽器の実技を海外からの参加者が日本で学ぶ研修であり、2007 年より始まった。コロンビア大学の雅楽・邦楽カリキュラム（実技レッスンクラス）の一環として、基本的には希望者の中から選抜された者が参加する。筆者（山本）はこれまで、当プログラムの立ち上げと運営面に焦点を当てて概観した上で[2]、音楽を専攻する参加者がどのように和楽器と日本音楽を普及、発信しているかを具体的に考察してきた[3]。本稿では、MP プログラム（雅楽部門）の教習面に焦点を当て、外国人に日本音楽を伝える方法について検討する。

元来、日本音楽の記譜法は、五線譜とは異なる「奏法譜」「唱法譜」と呼ぶべきものであり、楽器の奏法、歌の歌い方を示すことが目的であるため、楽器ごと、種目ごとに異なる形態をとる[4]。そして、和楽器の音を口で唱える唱歌（しょうが）を用いることにより、日本音楽は身につけられてきた。「唱歌には、音色や旋律、リズム（拍、間など）、奏法等、和楽器の音楽に関わる全ての要素が含まれており、それらを丸ごと捉えることが可能」[5] となる。そのため、現在の学校教育でも唱歌の重要性に注目し、唱歌を取り入れて日本音楽を教えるケースが増えている[6]。つまり、このような伝統楽譜や唱歌を用いて、師匠の演奏を一節一節覚えながら、身体に覚えこませるやり方により、日本音楽が長い間、伝承されてきた[7]。MP プログラムはまさに日本音楽の本来の伝統的な教習方法に基づいており、そのことが外国

人にとってどのような意味、効果があるかを検討するのに格好の対象であると考える。そこで、本稿は、MP プログラム（雅楽部門）の事例を分析することにより、日本の伝統的な教習方法に依拠した方法を外国人に適用する意義について検討することを目的とする。その際、MP プログラムの参加者がもともとアメリカで履修しているコロンビア大学の授業、そして日本で体験する個人レッスン、国立音楽大学のグループレッスンなどの内容を分析することにより、外国人の和楽器教習としての MP プログラムの特徴を明らかにする。

1-2　研究の対象と方法論

本研究の対象は、MP プログラム（雅楽部門）の教習方法である。そこで、まずプログラムの特徴を捉えるために、2015 年の参加者である筆者（清水）が、国立音楽大学（日本）とコロンビア大学（アメリカ）の雅楽授業、MP プログラムを体験しているため、この三つの教習形態を比較・分析する。

続いて、MP プログラム（雅楽部門）の教習方法を具体的に見ていくために、プログラムを教える側と習う側それぞれの立場からの所感について分析を加える。研究方法は、教える側には聞き取り調査を行い、習う側へはアンケート調査を実施した。表 1 は、本稿に関わる聞き取り調査の詳細である。

表 1　聞き取り調査の対象者

氏名（敬称略）	担当・役割	担当期間（年）	調査日	備考
バーバラ・ルーシュ	代表・設立	2007 ～現在	2016 年 8 月 17 日	アメリカ在住のためメールにて回答
中村仁美	篳篥指導	2007 ～現在	2016 年 8 月 2 日	
宮田まゆみ	笙指導	2007 ～現在	2016 年 8 月 4 日	
三浦礼美	笙指導	2007 ～現在	2016 年 8 月 1 日	
笹本武志	龍笛指導	2007 ～現在	2016 年 7 月 29 日	

一方、習う側からのフィードバックとして、そしてプログラムの成果を見るために、歴代参加者（海外在住）全員にメールによるアンケート調査を試みた。アンケート調査は基本的に参加年の体験後に行ったが、2015 年以前の参加者については 2016 年 7 月に一斉に実施した。アンケート内容は、コロンビア大学の授業を履修した経緯、プログラムの生活面及び教習面、伝統的な教習方法、参加しての所感、プログラムの評価などである。

雅楽部門のこれまでの参加者は 33 名[8] であり、専攻楽器は三管（篳篥・龍笛・笙）を中心とされており、各配分人数は年毎に異なる。楽器別の参加者数 (延べ人数) を表 2 にまとめた。このうちアンケート調査の回答が得られたのは、19 名であった。

表 2　参加者の楽器別人数の推移（単位：人）

年度	篳篥	龍笛	笙	その他	小計
2007	2	2			4
2008		1	3		4
2009	1	1	1		3

年度	篳篥	龍笛	笙	その他	小計
2010	1		2		3
2011	東日本大震災により中止				
2012		1			1
2013	2		1		3
2014	1	1	1		3
2015		1	2		3
2016	2	1	1	楽箏 1	5
2017	1	1	1		3
2018		1			1
合計	10	10	12	1	33

2　MP プログラム

筆者（清水）は、2015 年に MP プログラムに参加した他、2014 年より必要に応じて、プログラムのコーディネーター業務のアシスタントを勤めてきた。またそれ以前に、学部生として、国立音楽大学にて雅楽の授業を、そして大学院生として、コロンビア大学の雅楽カリキュラムを履修した。MP プログラム参加者は、基本的に、コロンビア大学にて雅楽のカリキュラムを履修している必要があり、プログラム期間中は国立音楽大学の雅楽の授業にも参加する。この二つの各プログラムは独自の長所を持っており、MP プログラムでは、参加者がその二つのカリキュラムを体験できるのを大きな利点だと筆者は見ている。国立音楽大学とコロンビア大学の雅楽の授業は、本質的に異なるものであり、対等に比較することは困難であるが、両者の比較は MP プログラムの特徴を際立たせるのに有効であると考える。ここでは、両プログラムの授業内容や設備・環境を比較した上で、MP プログラムの特徴の客観的な分析を試みる。

2-1　国立音楽大学の授業「日本伝統音楽表現（雅楽）」

国立音楽大学の雅楽の授業は、宮田まゆみ（笙）、中村仁美（篳篥）、越後眞美（龍笛）が講師を勤めており、学生は自身の経験・技能に合わせて、初級・中級・上級の三つのコースに振り分けられる。履修者のほぼ全員が、国立音楽大学の学部生であり、教職課程の必修科目の一環として履修している学生も少なくない。初級は主に平調の《越天楽》や《五常楽》、中級は《陪臚》など、そして上級では現代音楽を学ぶこともある。年度にもよるが、笙の学生数は初級で 10 名弱、中級が 5 名ほど、そして上級が 1 ～ 2 名になる。月 1 度の合奏練習以外では、学生は三管（篳篥、龍笛、笙）から選択し、楽器ごとに別々の部屋で授業を受ける。授業は日本語で進められ、MP プログラム参加者の日本語能力に応じて、講師が個別に英語で対応する。

2-2　コロンビア大学の授業「World Music Ensemble: Gagaku」

コロンビア大学の雅楽の授業は、佐々木ルイーズ（龍笛）が正式な講師を勤め、楽器毎のパート練習の他、アンサンブル練習を行う。また、篳篥は佐々木教之が、笙は福井陽一が実技指導を補助している。

履修生のうち、学部生は教養課程の必修科目として履修している場合が多いので、音楽を履修している学生[9]はごく一部である。単位修得型の授業ではあるが、履修している学生のうち半数は外部からの聴講生である。聴講生は、他大学の学生はもちろん、西洋音楽の演奏家や作曲家、写真家など、芸術分野での仕事をしている人がほとんどである。こちらも年度によるが、2015 ～ 2016 年度には合計 20 人前後の参加者が雅楽を履修していた。

2-3　練習環境の比較

演奏技術の上達には、練習環境の充実が非常に重要である。

国立音楽大学またはコロンビア大学の学生は、東京またはニューヨークに長期的に住んでいるのが一般的であり、楽器の練習場所を確保する術を知っている。国立音楽大学の学生であれば、SPC ピアノ練習室[10]を借りることができる。

コロンビア大学では、各学部・大学院によって部屋の貸し出し規定が異なり、コロンビア大学新聞『Columbia Spectators』の記事[11]にも記載されている通り、練習部屋の不足が指摘されている。しかし、これらはピアノや大型打楽器などが利用可能な部屋を指しており、多くの施設が 24 時間、アクセスが可能であることを考慮すれば、雅楽の管楽器の練習場所を確保することは、難しいとは言えない。また、コロンビア大学の寮生は、寮付属の楽器練習室を 24 時間使用できる[12]。

MP プログラム参加者は、慣れない外国の地で練習場所を自分で確保することは極めて難しく、プログラムが提供する場所を使用することになる。楽器の練習は音が出るため、MP プログラム参加者の宿泊施設である国際文化会館内で行うのは困難である。練習は、基本的には国際文化会館に隣接する、東洋英和女学院の教室を借りて行っている。参加者より、練習可能な時間を伸ばして欲しいといった要望が寄せられたことを受け、プログラムとしては、武蔵野楽器など、別の練習場所を提供する他、2017 年より、東洋英和女学院にて練習可能な時間を大幅に伸ばすことに至った。表 3 は各大学及びプログラムの練習室の利用可能な時間帯を比較したものである（MP プログラムは、東洋英和女学院の教室の利用可能時間）。

表 3 各大学及びプログラム練習室の利用可能な時間帯の比較

	平日	土曜日	日曜日
国立音楽大学	8:00 – 20:50	8:00 – 20:50	9:00 – 16:50
コロンビア大学	24 時間	24 時間	24 時間
MP プログラム	18:00 – 21:00	15:00 – 21:00	9:00 – 21:00

四

国立音楽大学及びコロンビア大学は、充実した練習施設を擁するものの、他の器楽専攻者もしくは楽器奏者と同じ部屋を借りる必要があり、混み合う時間帯などには、練習場所の確保が困難になる場合もある。MP プログラムが東洋英和女学院の教室を使わせてもらえる時間帯は、上述の 2 大学と比べ、やや少なめに思われるが、利用可能な時間帯内であれば、参加者一人一人に必ず部屋が割り振られるというメリットもある。

2-4　成果発表の比較

音楽の上達に欠かせないのが、授業やレッスンで学んだことをアウトプットする機会である。

国立音楽大学では、毎年 11 月初頭に行われる国立音楽大学芸術祭にて、有志の学生が雅楽を披露する機会がある他、12 月には「伝統音楽コース合同発表会」が行われる。残念ながら、MP プログラム参加者は 5 ～ 7 月にかけて日本に滞在するため、上記の演奏会に参加することはできない。しかし、発表会へ向けた合同練習に参加することにより、自身のレパートリーを広げることができる他、雅楽の専門家である講師陣の指導の下、アンサンブル能力を高められる効果がある。一方で、コロンビア大学の場合、毎年春に 1 週間の間、日本から雅楽の指導者を招待し、学生たちとミラーシアター（Miller Theatre）にてコンサートを行う他、学期末の 12 月と 5 月にセント・ポールズ会堂（St. Paul's Chapel）にて、成果発表会を行う。

MP プログラムでは毎年、東洋英和女学院高等部の学生たちとの合同アンサンブルを組み、「ランチコンサート」で成果を発表する他、東京都世田谷区内の小学校にて小学生に雅楽を紹介する機会がある。また、MP プログラム・コーディネーターの筆者（山本）が担当している洗足学園音楽大学の「東洋音楽史」の授業にゲストとして呼ばれることもあり、一方向的な演奏会や成果発表という形ではなく、人と人との距離感が近く、聴き手の反応を直接体感することのできる体験の場となっている。これが MP プログラムに参加した学生たちの自信に繋がり、プログラム終了後に自国へ戻った際、その音楽を広める動機に繋がっている可能性がある。

2-5　MP プログラムの特徴

上記 2 大学の雅楽の授業は、専攻外の授業という位置づけであり、楽器の練習だけに没頭するのは難しい面がある。その点、上述の通り、MP プログラムは、すでに和楽器（雅楽）をアメリカで学んだ参加者が 6 週間、日本で集中的にその楽器を学ぶコースである。往復の渡航費、宿泊費、日本での交通費、そしてレッスン代など、食費以外の必要経費を全てプログラムが負担[13]することにより、熱心な学生たちに、楽器を学ぶための魅力的な環境を提供している。これは、意欲的な参加者にとってはまたとない機会である。また、本プログラムは、指導者との一対一の個人レッスンがスケジュールに組み込まれている。演奏技術の上達には一対一のレッスンで細かい指導を受けることが重要であり、この点が、上記 2 大学で雅楽を学んだ学生とは大きく異なっている。例えば、コロンビア大学では専任の笙指導者がいないため、福井陽一の不在時は、MP プログラム参加者など、経験のある笙奏者が、新しい学生に手取り足取り、合竹名や呼吸法などを教えるスタイルを取っている。しかし、それでは必然的に限界が見えてくる。MP プログラム参加者は、師匠からの口頭伝承の重要性そして応用性を体験し、その必要性を訴える。以下、習う側のアンケート調査回答から該当部分を抜粋する。

回答者[14]	専攻楽器	回答（下線は筆者加筆[15]）
参加者 2	笙	（一対一の個人レッスンについて）素晴らしいと思います。質問や、理解できないことがあれば、すぐに先生方に直接聞くことができるため、学びのペースが非常に早く感じます。また、雅楽の伝統楽譜には、多くの重要なディテールが記されていないため、口頭伝承は、この音楽に合った学び方だと思います。一対一のレッスンがなければ、多くの重要な情報が記録されないままになってしまうでしょう。

他の参加者からも、手移りなど、伝統楽譜には書かれていない情報は、やはり口頭伝承でしか学べないといった、一対一のレッスンについての肯定的な意見が目立つ。

また、MP プログラムのもう一つの重要な特徴として、国立音楽大学及びコロンビア大学の雅楽の授業を履修するだけでは不可能な、幅広い体験が可能である。伶楽舎の奏者より個人レッスン楽器を受けること、宮内庁楽部の楽師による指導が体験できる小野雅楽会での稽古への参加、宮内庁楽部の見学、国立音楽大学での雅楽の授業参加、その他様々なイベントへの招待など、非常に濃密で充実した体験日程が用意されている。

3　プログラムにおける伝統的な教習方法

3-1　唱歌[16]

まず唱歌を習得してから、はじめて楽器を手に取っての稽古が許されると言われるほど、雅楽においては唱歌を身につけることが重視されている。

三管の唱歌は楽器ごとに異なる。篳篥と龍笛と笙は「ト」「ラ」「ロ」「ル」「タ」などの意味のない一連の音節を旋律にのせて歌う[17]。ただし、龍笛は実際の演奏音と唱歌で歌う音が異なる部分がある[18]。笙は和音（合竹）の名前を歌詞にし、篳篥に似た旋律を歌う。和音の一番下の音が唱歌の旋律となる[19]。

教える側の聞き取り調査によると、全員が唱歌を身につけさせている。特に笙の場合、唱歌が篳篥の旋律に基づいているため、唱歌をきちんと身につけることは合奏のためにも重要だという[20]。

習う側のアンケート調査回答も、ほとんどが唱歌の必要性を認めている。下記の回答は、唱歌の必要性について、息のコントロール、ピッチやリズムなど曲そのものを理解し、覚えられるメリットについて触れている。

六

回答者	専攻楽器	回答（下線は筆者加筆）
参加者 4	篳篥	唱歌は、曲のメロディーを自分のものにする役割以外に、息のコントロールをより効果的に使うことの助けになりました。
参加者 10	龍笛	唱歌は、人から人へこの音楽を引き渡していく際、非常に重要な役割を果たします。私は、ピッチやリズムをこの方法で学ぶのが好きです。
参加者 13	龍笛	唱歌を覚えることにより、曲そのものを覚えてしまうことが可能なので助かります。
参加者 19	龍笛	楽器に触れる前から、音楽を理解することができると感じます。

特に、笙の唱歌の意義について重点的に教わった参加者もいた。

回答者	専攻楽器	回答（下線は筆者加筆）
参加者 16	笙	笙の場合、唱歌の知識がなくても合竹・手移りを習得することは可能です。しかし、合奏においての笙の役割をするには唱歌を熟知することが必要だと 6 週間の間言われ続けてきました。

一方、唱歌を歌うことに忍耐力を要すると言う者、あるいは歌うのが恥ずかしかったと負担を感じた者もいる。

回答者	専攻楽器	回答（下線は筆者加筆）
参加者 2	笙	正直、楽器を早く練習したくても、まずは唱歌を練習しなければいけないといった状況に対するフラストレーションもありましたが、それにより、私は忍耐力や集中力を学ぶことができたと思ってます。
参加者 12	笙	私は、唱歌は大変重要だと思う一方で、定期的に歌うのは大変な忍耐力が必要になってきます。
参加者 7	篳篥	唱歌を歌うことが少し恥ずかしかった時期もありますが、学びのプロセスの一環として、楽しめるようになりました。

3-2　伝統楽譜 [21]

雅楽の伝統楽譜は、音楽を詳しく記述するものでなく、要点だけを記号化した備忘録の役割が大きい。篳篥と龍笛はカタカナの唱歌を中央に置き、指穴名は脇に添えている。一方、笙は和音や単独の管名の譜字を漢字で書いた楽譜を用いる [22]。

教える側は口を揃えて、伝統楽譜を使用すべきだと言うが、五線譜の使用を認める場合もある。例えば、現代曲を学ぶ場合と単発で古典曲を学ぶ場合である。五線譜が音楽を思い出すきっかけになればよしとする考えである [23]。また、唱歌を学ぶ際に聴音して自ら音を五線譜で示す参加者もいるが、後に正しく再現されれば構わないと判断される場合もある [24]。

一方、西洋の五線譜に慣れている参加者にとっては、新たなシステムの伝統楽譜に馴染むのに苦労したり、時間がかかったりという回答が、以下の通り多い。

回答者	専攻楽器	回答（下線は筆者加筆）
参加者 12	笙	かなり難しく、最初は苦労しました。今でも、笙以外の楽譜を見ると、解読するのに苦労します。
参加者 4	篳篥	日本語、もしくは中国語が読めない人にとっては苦痛であるかもしれません。
参加者 9	笙	伝統楽譜は複雑なので、必ず先生に読み方を説いてもらわなければなりません。
参加者 19	龍笛	時間（拍）の区切りがもう少し分かりやすく記譜されているほうが良いです。こういった意味で、唱歌は、雅楽において、絶対に必要でしょう。

その一方で、伝統楽譜の学習は西洋音楽との違いを再確認し、楽譜の知識を増やし、日本語への興味も引き出したと肯定的に受け止めている者もいる。

回答者	専攻楽器	回答（下線は筆者加筆）
参加者 2	笙	伝統楽譜を学ぶことにより、西洋音楽とは全く別のルーツを持つ音楽に触れているのだと再確認させてくれます。
参加者 17	篳篥	雅楽の伝統楽譜に触れることで、楽譜の種類に関する知識を少し増やすことができて嬉しく思っています。また、日本の記譜法を学んでいると、日本語への興味も湧いてきました。いつか日本語を勉強してみたいです。

3-3　口頭伝承[25]

雅楽の伝統楽譜に書かれていない詳細なニュアンスなどについては、師匠が口頭伝承で伝える必要がある。例えば、篳篥の塩梅[26]などの奏法は細かく楽譜に指示されていないので、口頭伝承で伝えられている。また、笙の手移りや息の使い方なども楽譜に示させないため、師匠からの口頭伝承で習うものである[27]。

多くの参加者たちは口頭伝承が必要だと答え、少なくとも一対一で師匠から伝統楽譜に書かれていない多くの要素を学べるメリットは感じているようである。

回答者	専攻楽器	回答（下線は筆者加筆）
参加者 10	龍笛	西洋音楽の一対一のレッスンでも似たような教え方があります。他の生徒が周りにいない中、集中して先生方に教えて欲しいことを聞ける環境でした。
参加者 11	笙	楽譜からは読み取れない情報に接することができました。

具体的には、口頭伝承によって、雅楽や楽器に関する文化、笙の手移りなどが学べると回答している。

回答者	専攻楽器	回答（下線は筆者加筆）
参加者 15	篳篥	口頭伝承により、雅楽、そして楽器に付随する多くの文化を学ぶことができました。
参加者 1	笙	笙の手移りは口頭伝承で学ぶ必要があり、伝統音楽を学ぶ上で一番難しい箇所かもしれません。

その他、下記の回答も見られた。

八

回答者	専攻楽器	回答（下線は筆者加筆）
参加者 14	篳篥	多くの曲を学ぶには時間がかかります。

4　MP プログラムの効果と意義

6 週間に渡る MP プログラムは教える側と習う側にとって、どのような意味を持つだろうか。両者の調査回答からいくつか抜粋してみる。

4-1　教える側

6 週間の学びを経て、教師側が変わったと感じた点として、深く音楽を理解できるようになったことと、日本人との交流が挙げられている。

回答者	回答（下線は筆者加筆）
笹本武志	毎日集中してやっていくことで、音楽に対する耳ができてくる。音楽的に奥の方まで感じることができるようになって帰っていく子もいる。
宮田まゆみ	すごく上達する。はじめは英語をたくさん使わないと余り理解できなかったが、すごく日本の文化を尊重してくれて、積極的に日本のやり方に近づこうとしている。
宮田まゆみ	興味のあることを思いっきり勉強できるのはよい機会。交流という点で考えてみても、国立の学生たちにもとても刺激になっている。

また、今後の課題としては、「合奏の強化」と「アンサンブルの指導」が挙げられている。

回答者	回答（下線は筆者加筆）
中村仁美	MP プログラムは個人レッスンが主体なので、人の音を聴いて合わせるという感覚は中々身につけられない。少人数でうまくいかないところから始めて、アンサンブルを作っていく機会を持てたらいいと思う。
笹本武志	将来的には指導的な立場になってくれたらよい。
三浦礼美	後輩たちに指導してくれている。経験したことを伝えていってほしいと思う。
中村仁美	本当に学んだものを活かすところまでやってくれたらいいなと思う。例えばニューヨークを離れてずっと雅楽ができなくても、その人の人生の中で雅楽を学んできたことが他の部分に活かされたりとか、そういうこともあるかも知れない。

さらに、多様な形で雅楽が海外に「普及」されていくことを望む声もあった。

回答者	回答（下線は筆者加筆）
三浦礼美	純粋に雅楽一揃えで活動というよりは、多分ニューヨークの中では、他のものとコラボレーションしたりという興味の持たれ方が多いと思われる。そういう意味で個々のスキルが高ければ高い程、色々なものに対応できるのではないか。

九

4-2　習う側

6 週間の日本滞在により雅楽を習得する MP プログラムの効果としては、まずは音楽面での成長が挙げられるだろう。ほとんどの回答には技術的な進歩について触れられていたが、中にはこれまで触れる機会の少なかった非西洋音楽を学ぶことにより、音楽に対する意識が変わったというものもある。

回答者	専攻楽器	回答（下線は筆者加筆）
参加者 18	龍笛	この体験は、僕に非西洋音楽の伝統について学ぶ機会を与えてくれたのと同時に、「音楽」全般に対する理解を深めてくれました。

そして、雅楽の伝統的な学びによって、その姿勢や考え方、視点が変わった、あるいは忍耐力がついたとする回答も見られた。

回答者	専攻楽器	回答（下線は筆者加筆）
参加者 11	笙	雅楽のような、長い歴史を伴う音楽を学ぶには、6 週間という短い時間では何も成し遂げられませんが、学びの姿勢などを身体に叩き込むことは可能だと考えます。MP プログラムを通じて、雅楽に対する考え方や姿勢が変わったような気がします。
参加者 17	篳篥	物の見方が変わりました。楽器の修得に必要な忍耐力がついたことの他、リード作りの際に自分の「テンポ」を見つけなければならないことも学びました。これらのことは、私の日常に応用できることであり、音楽と人の関係性を考えさせられるものだと思います。

さらに、日本や日本文化への理解が深まったり、日本に対する偏見を払拭したりすることができたという声、日本との繋がりを維持し、日本文化の普及に携わりたいという声もあがっている。

回答者	専攻楽器	回答（下線は筆者加筆）
参加者 3	篳篥	日本で 6 週間滞在できる意味は、私にとって非常に大きなものです。なぜなら、演奏法の習得と日本文化への理解の両面で成長できるからです。
参加者 4	篳篥	日本に滞在中、私は「日本」に対する公平ではない偏見を捨てることができました。時間、距離、そして歴史によって作られた、私の中にある日本のイメージを良い意味で壊してくれました。
参加者 2	笙	日本への繋がりを深めてくれたと思います。私は今、自分の仕事と、私が興味を持っている日本、または日本文化をどのように繋げるかを考えているところです。
参加者 12	笙	この経験は、私が日本の雅楽を追い求める大きなスタートとなりました。今後も、オーストラリアで、日本文化を広げていきたいと考えています。

5　結論

これまで、コロンビア大学 MP プログラムの実例を通して、外国人が和楽器（雅楽器）を学ぶ際の教習法とその効果について概観した。

唱歌については、教える側も習う側もその必要性を認めている。6 週間、徹底的に教え込まれることにより、参加者は唱歌を体得し、その効果を実感したようである。また、五線譜とは異なる伝統楽譜の記譜にも慣れ、視覚的にも西洋音楽と非西洋音楽の違いを認識することに繋がったと思われる。さらに伝統楽譜で記すことのできない情報、微妙なニュアンスについては、師匠との一対一の口頭伝承から学んだ。グループレッスンでは得られない個人の対峙による学びの必要性も理解したようであった。

一方、国立音楽大学とコロンビア大学の雅楽の授業を比較した結果、以下のことが明らかになった。MP プログラムでは、プログラムの名称の通り、師匠と弟子の一対一の個人レッスンに重きを置いている。これは、上記２大学の授業では見られない特徴である。その点、一対一のレッスンでは不可能なアンサンブル練習の体験を、国立音楽大学とコロンビア大学の授業で補っているとも言える。MP プログラムは、日本に暮らす日本人ではなかなか体験できないような、様々な場、そして形態での学びを同時に体験することが可能となっている。また、参加者は、プログラム期間中、小学生から大学生まで、そして年配の愛好者との交流を通して、成果をアウトプットすることができる。短期集中型の濃密な研修であり、大学の授業とは全く異なる性格を持つプログラムであると言える。

結果的に、こうした伝統的な教習方法による和楽器（雅楽器）の習得によって得られたものは、音楽面での上達だけでなく、参加者の音楽的な視野を広げ、日本文化を学ぶ姿勢を身につけ、日本や日本文化に対する印象を変えて理解を深め、最終的に日本文化を広めることに結びつく可能性である。このように和楽器（雅楽器）一つを徹底的に身につけることは時間がかかるが、確実に日本文化への理解を促し、学習者の視点まで変え得ることが明らかになった。日本人と育った環境も文化的な背景も異なる外国人が、日本本来のやり方で和楽器（雅楽器）を習得することはなかなか実現し難いが、容易く幅広く日本音楽を普及することとは違った効果が明らかに認められる。そのような意味で、伝統的な教習方法に基づく和楽器の深い学びは、日本人のみならず外国人にも期待される。

注

1　Mentor は「師匠」、Protégé は「弟子」を意味し、当プログラムでは師匠と弟子が対峙する口頭伝承による和楽器の稽古が中心となる。
2　山本華子 2017。
3　山本華子 2018。
4　月溪 2010：55。
5　日本音楽の教育と研究をつなぐ会編集委員会（薦田治子）2018：2。
6　「日本音楽の教育と研究をつなぐ会」は伝統音楽に関わるより良い音楽教育実践の在り方を考えるグループであるが、日本音楽の将来のための教育の役割を重視し、研究者がコーディネーターとなって、演奏家、学校、教育行政のネットワークの構築をめざし、最近では唱歌を用いた学習の研究、教材作り、普及活動などを行っている。https://tsunagu-japanesemusic.blogspot.com/（2018 年 8 月 24 日アクセス）。
7　月溪 2010：60。
8　2 回参加した者が 1 名いるが、専攻楽器が異なるため、述べ人数を示した。
9　コロンビア大学には器楽専攻がなく、音楽専攻は、作曲（Composition）、音楽理論（Music Theory）、音楽学（Musicology）、または民族音楽学（Ethnomusicology）のいずれかに当てはまる。
10　http://www.kunitachi.ac.jp/undergraduate/office/index.html（2018 年 8 月 24 日アクセス）。
11　Columbia Spectators「For Columbia musicians, lack of campus practice space hinders talent」（2018 年 1 月 19 日付）。
12　https://mpp.music.columbia.edu/music-practice-rooms-and-policies（2018 年 8 月 24 日アクセス）。
13　山本 2017：97。
14　アンケート回答者の一部が氏名の公表を望まないため、便宜的に数字で表し、専攻楽器も示した。

15　回答の中で筆者が重要だと判断した部分に下線を引いた。
16　アンケート回答は、「唱歌（Shoga）を用いた修得方法はどう思いますか」の質問回答を取り上げた。
17　寺内 2003：32。
18　日本音楽の教育と研究をつなぐ会編集委員会 2018：33。
19　日本音楽の教育と研究をつなぐ会編集委員会（黒川真理恵）2018：34。
20　宮田（聞き取り調査）2016。
21　アンケート回答は、「五線譜ではない伝統楽譜についてはどう思いますか」の質問回答を取り上げた。
22　寺内 2003：32。
23　笹本（聞き取り調査）2016。
24　三浦（聞き取り調査）2016。
25　アンケート回答は、「一対一の口頭伝承 (oral tradition) はどうでしたか」の質問回答を取り上げた。
26　ある音から別の音に移る際に、微妙な音の変化を添える篳篥の奏法。
27　遠藤徹、S.G. ネルソン 2000：173、175、181。

引用・参考文献

遠藤徹、S.G. ネルソン 2000『【重要無形文化財】雅楽 宮内庁式部職楽部　解説書』財団法人下中記念財団
クリストファー遙盟、山本華子 2012「コロンビア大学 MP プログラムの邦楽部門が始動」『邦楽ジャーナル』第 310 号 33
薦田治子 2008「海外への日本の芸術文化の紹介」『世界の芸術文化政策』放送大学芸術振興会、149-164
清水チャートリー 2017「現代音楽の中の笙～ニューヨークからの視点～」『雅楽だより』第 49 号 3-4
政策研究大学院大学編 2016『実演芸術で世界とつながる～分野を超えてネットワークを広げ、深めるために』政策研究大学院大学
筒石賢昭山 2013「国際学生と日本人学生の日本伝統音楽尺八の比較研究」『学校音楽教育研究』第 17 巻 187-188
月溪恒子 2010『日本音楽との出会い―日本音楽の歴史と理論』東京堂出版
寺内直子 2003「雅楽」『日本の伝統芸能と和楽器【解説書】日本の伝統芸能の魅力　上巻』NHK ソフトウェア、15-36
寺内直子 2006「コロムビア大学での雅楽コース新設について」『雅楽だより』第 7 号 5-6
寺内直子 2009「ニューヨークの雅楽」『雅楽だより』第 9 号 10
寺内直子 2015「越境する雅楽 : 海外の大学カリキュラムにおける日本伝統音楽」『国際文化学研究』第 44 号 1-28
日本音楽国際交流会編 2015『世界における日本の古典音楽―海外の目から見た―』日本音楽国際交流会
日本音楽の教育と研究をつなぐ会編集委員会 2018『唱歌で学ぶ日本音楽』日本音楽の教育と研究をつなぐ会
バーバラ・ルーシュ 2008「雅楽の若木をニューヨークで育てる」『雅楽だより』第 12 号 8
バーバラ・ルーシュ 2009「ニューヨークコロンビア大学雅楽管絃アンサンブル」始動」『邦楽ジャーナル』第 269 号 47
バーバラ・ルーシュ、青木健 2016「日本音楽プログラム始動」『雅楽だより』第 47 号 1,4-8
籾井徹 2017「雅楽との新しい出会い」『雅楽だより』第 51 号 4-5
山本華子 2010「2010 年度 MP プログラムを終えて」『雅楽だより』第 23 号 9-10
山本華子 2012「2012 年度 MP プログラムを終えて」『雅楽だより』第 31 号 5-6
山本華子 2017「運営面から見た外国人のための和楽器教習―コロンビア大学 MP プログラムを例に―」『洗足論叢』第 45 号 93-104
山本華子 2018「和楽器と日本伝統音楽の普及の一施策として―コロンビア大学 MP プログラム音楽専攻者による活動に焦点を当てて―」『洗足論叢』第 46 号 355-363

山本華子 2018「2018 年度 MP プログラムを終えて」『雅楽だより』第 55 号 9
ルース・エミリー・ローゼンバーグ 2007「コロンビア大学雅楽・邦楽プログラム夏期集中研修に参加して」『雅楽だより』第 11 号 8